

---

# 遺されたモノ

和泉 優衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遺されたモノ

### 【Nコード】

N2178J

### 【作者名】

和泉 優衣

### 【あらすじ】

工藤新一と毛利蘭は結婚し、平凡な日々を送っていた。

ある日新一が蘭に離婚しようと言う・・・。

新蘭です＼（＾Ｏ＾）／

## 01・名探偵の相談

毛利蘭と工藤新一が結婚したのは今から1年ほど前だ。

高校を卒業して、新一は探偵事務所を開いた。

とても評判がよくて依頼人が多かった。

そのせいで時間をなかなか作ることができなくて、2人はなかなか会えなかった。

しかし2人の縁は切れることがなかった。

お互い20歳になった頃、新一からのプロポーズで結婚を約束した。

お互いの親に挨拶しに行くと、小五郎がかなり渋っていたが最後には了承してくれた。

全てが順調だった。

子供も1人目が蘭のお腹のなかに居てあと7ヶ月で生まれる。

2人とも楽しみで仕方なかった。

「新」。今日も依頼人の家に行くの？」

「あ、いや……。今日予約は入ってないんだ。」

「そうなの？じゃあさ、久しぶりに一緒に買い物行かない？」

「え、あの……。ごめん。仕事はないけど行くところあって……。」

「そっか」。残念。また今度だね！」

「ああ。」めんな！」

新一、仕事以外の用事なんてめずらし・・・

俺が今から行くところは、灰原哀・・・いや、宮野志保のところだ。

組織崩壊後、完成させたAPT-X4869の解毒剤で元の体に戻って、現在は病院を経営している。

今日は久しぶりにその宮野に会いに行くのだ。

宮野は信頼も厚く、待ち合い室の患者の数はたくさんだった。

「 工藤新一様。」

やっと名前を呼ばれたので診察室まで行った。

消毒液の匂いで包まれたこの部屋の奥には懐かしい顔があった。

「久しぶりだな・・・宮野。お前、黒じゃなくて白も似合うんだな。」

「そうかしら？ところで・・・工藤くんから来るなんて珍しいわね・・・というより初めてかしら？」

「そうだな。事件ばかりで病院開いたって聞いてもなかなか来れなかったんだよ。・・・それより、宮野に相談があるんだけど・・・。」

「それって蘭さんのこと？」

「 蘭は直接的には関係ない。けど結果によっては巻き込むことになるのかな・・・。」



## 01・名探偵の相談（後書き）

久しぶりですね！

最近何の作品も書いていなかったのですが、感想やリクエストをくれた方が居て、とてもうれしかったです。

リクエストについて話すとこれからの内容が分かってしまうので、また後日触れさせていただきます。

この話はもう最後の方まで書きおわっているので更新も早くできそうです。

頑張るので次も見てください！

12/31



## 02・聞きたくない

「ただいま。」

「お帰り、新一。早かったんだね。」

「今日は一緒に買い物行けなくてごめん……。」

「仕方ないよ。今度出かけようね!」

「ああ……。」

いつもより少しテンションが低い新一に蘭は疑問を抱いた。

「……どうかしたの?」

「わりい。もう行けない……。」

「え?」

「もうさ・・・出掛けらんねーよ。」

「なんで？大きな事件あったっけ？またこの前みたいに1ヶ月くらいの出張でもあるの？」

「違うけど・・・。」

「え・・・じゃあさ、出掛けられないほど読みたい小説でも出来たの？」

「・・・ごめん。」

新一はその一言を放ったあと、自分の部屋に入って行ってしまった。

新一はなんで謝ったの？

新一、用事もないのに断ったのかなあ？

あ・・・もしかして嫌われたのかな。

嫌いになったから一緒に出かけたくなかったのかな・・・。

私、新一に何かしちやっったのかな・・・？

なら謝らなきゃ・・・。

新一の部屋の前まで来て、勇気を出して名前を呼んだ。

「しん。」

しかし名前を最後まで言い終わらないうちに私は呼ぶのをやめた。

新一は誰かと電話しているみたいだったから。

息を潜めて会話を聞く。

「離婚し……がいいのかな。このままじゃだめだよな……」

離婚？

新一は何をいつてるの？

誰と電話で話してるの？

「いきなり……の前から居な……より離婚……俺の事忘れてもらったほうがいいんだよな……。」

どういふこと……？

なんで……？分からないよ……。

「好きなんだよ……。だから離婚する……。いいんだよな。」

「新一……。？」

普段新一が口にしない離婚という言葉が何度も聞き取れたから、自分でも驚いて思わず小さく言葉を発してしまっていた。

「ああ。わりい……。ちょっとあれだから、また今度……。」

新一は私の声に気付いたようで、電話を終わらせた。

自分でもやってしまったと思った。

ここで新一に話しかけても何から聞けば良いのか分からない。

電話の内容はよく聞き取れなかったけど、離婚とか言ってたから私のお話してたんでしょ？

何を話せば……。

「何？」

新一が部屋のドアを開けて最初に放った一言。

それはいつもの優しい新一の声ではなく、不機嫌な感じの声だった。

「え……。」

「用ないなら俺が言う。俺たちさ……。」

新一のこんな怖い声、聞いたことない。

「嫌……！言わないで……。」

言われることはなんとなく分かっていた。

“離婚しよう”

でも実際に言われてしまうとどうなるか分からなくて……。

出来れば聞きたくなかった。

「ごめん。」

頭では分かっているけど心がついていけない。

もう終わりなんだ、戻れないんだ、と思うと悲しくなって、思わず泣いてしまった。

「ッ・・・泣くなよ。蘭は悪くねーよ。俺が全部悪いから・・・」

新一が泣かせたのに。

泣くなよってなによ！

泣くのもダメなんだ・・・？

「んで？・・・なんで離婚しなきゃいけないの？」

新一は首を横に振るだけで何も答えてはくれなかった。



## 02・聞きたくない（後書き）

HAPPY NEW YEAR！（＾Ｏ＾）／

長文で書くこうと思ってるんですけど、なかなか長くならないです（  
、、）

毎回悩んでるんですが、

あとがきって何書けばいいんですかね？（＾＾）

って事でアンケートとります

皆さんが名探偵コナンで一番好きなCPはどれですか？

メッセージでも感想の所でもいいので教えて下さい！

次回はそれについて話題にします

1 / 1

### 03・忘れられない

あの日の次の日に目覚めたら置き手紙があって新一は居なくなっていた。

蘭へ

本当にごめん。

とりあえず出てくよ。

こんな俺じゃ蘭を幸せに

する資格ないからさ。

俺が全部悪いから。

蘭は悩まなくていい。

離婚とか親権はまた話そう。

1つ言っておくけど、

俺が蘭を好きだったのは

本当だから。

でも早く忘れてくれ。

他の良い奴見つけろよ。

新一

この手紙を読んで本当に新一が分からなくなった。

その日以来あまり外に出なくなった私に少なからず疑問に思っていた園子は食事に誘ってきた。

半ば強引に連れ出されたというのが本当のところだが、その行為はありがたかった。

最初は同級生のあの人が結婚したとか、他愛ない会話をしていたのだが、その辺りの会話が一段落した時に園子が話題を変えた。ついに核心についてきたのだ。

「・・・で、何かあったんでしょ？」

「え？」

いきなりその話題に変わったので焦りを隠せなかった。

「とぼけても無駄よ。顔に書いてあるんだから。工藤くんでしょう？  
原因。」

「園子は何でもお見通しだね。」

「蘭はいつも工藤くんの事しか考えてないでしょ？」

「そ、そんなことないわよ！」

「はいはい。そういう事しておくね。・・・で？」

「理由も言わずにね、離婚しようって言ってきたの・・・。」

「心当たりは無いの？」

「うん……。それでその話された次の日に新一、出てっちゃった。」

「離婚切り出されるような事して覚えてないはずないよね……。蘭は悪くないよ。どうせ他に好きな女が出来たのよ。最低な奴。」

「新一を悪く言わないで……。」

「ごめん。でも現に出てっちゃったんでしょ？工藤くんにやましい所があるんだよ。女じゃなかったとしても……。だからあんなやつなんて忘れちゃいなよ。私がもっといい男紹介してあげるから。」

「……うん。」

園子はあの日以来積極的に遊びに誘ってくれる。

2人きりで買い物や食事をしたりが多かったけど、合コンとかにも誘われた。

園子が集めた合コンのメンバーはさすが鈴木財閥！と言える面々で、

スポーツ選手、公務員、大富豪など、そこにいる私が恥ずかしいくらいで、その人たちと結婚したら幸せになれるのだろうけど・・・。

でもそこに行くたびに感じるがあった。

新一と違う。

当たり前のことで、むしろ一緒の方が困るのだが、そういう意味でなく、新一以外の人ではダメだった。

新一じゃないと私を幸せに出来ないんだ。

時間がたっても忘れられない。

なんで・・・。

あの日に何かあったのかな？

“誰かと電話してた日”に

「あれって・・・？」

ふと前を見ると、私が歩いている道のずっと前の方に見覚えのある、私の親友を裏切った最低な男がいた。

工藤くん・・・！

しかし、工藤くんの横には誰かが居た。

今日は蘭と一緒にじゃなくてよかったと本気で思った。

工藤くんの隣で一緒に歩いているのは紛れもなく女の人だった。

あれは有希子おばさまじゃない。

そしてよく見るとその女の人には見覚えがあった。  
。





### 03・忘れられない（後書き）

メッセージありがとうございました。

数人だったので何ともいえないのですが、

新蘭、新志が多かったですね。

私はやっぱり新蘭が1番好きです！

でも他のCPでも読みます（、、）

ああ、次は何のアンケートとりましょうか・・・（――；）

いま考えつかないので、話題は次回考えます

感想、メッセージお待ちしております。

あ、まだCPのアンケート続いていますよ（＾－＾）

まだ答えてない人はぜひ！

じゃあまた次回に。

#### 04・話を聞かせて

工藤くと歩いているのは数年前に近くにできた病院の先生。

とても人気があつて、町内の広報に写真とインタビューが載つてたもの。見間違えるわけがない。

やっぱり女か。

工藤くに確かめたかった。

しっかり工藤くんの口から言わせたかった。

「工藤くん！」

緊張して声が少し上ずったが気にせず大きな声で呼んだ。

私の声に気が付いたようでゆっくりとこちらに振り返る。

「園子・・・！」

「工藤くん、話があるんだけど。」

「工藤くん、私邪魔になるから失礼するわね。用も済んだし。あの時間だけは守ってね。」

あの女の人が帰ったので2人きりになった。

あの人が居たほうが気まずいのだろうが。

2人は喫茶店に入って飲み物を頼んだ。

しらけた空気を打ち破ったのは工藤くんだった。

「あのさ、園子にこんなこと聞くのも悪いんだけど、蘭は元気か？」

「え？蘭？」

なんで蘭の事を聞くんだろう？

蘭よりあの女の方が好きだから離婚切り出したんじゃないの？

罪悪感か。

一方的にやったから？

「蘭から聞いてるだろ？話。」

「え、うん。出てっちゃった、ってやつでしょ？蘭、ショック受けてたよ。家に引きこもってたし。」

「そっか……。俺、最低だよな。」

「最低よ。蘭の事大切にするんじゃないの？確か結婚する前にそんな事言ってたわよね？なのに女が出来るなんて！」

「え？女？」

「とぼける気？もてる男は良いわよね。有名な探偵ですもんね！蘭を捨てて乗り換え出来るからね！」

「あ、そうか。宮野の事が。そう見えても仕方ないか。年も近いしな。」

”そう見えても仕方ない” って事は・・・。

「じゃあ違うの?」

「別に女なんて出来てねーよ。園子が思ってるほど俺ってもてねーよ?」

「工藤くんの知らないところでもててるのよ。・・・女じゃないならなんで?」

「なんでって・・・。」

「言えないの? 蘭にも言わないで勝手に話進めて、それで良いと思ってるの? 蘭は・・・私の前では明るく振る舞ってるけど、多分苦しんでる。私じゃ助けられないんだよ。工藤くんじゃなきゃ! せめて理由くらい言わないと、蘭も私も納得できない。」

「蘭には俺から言うから、言わないでくれるか?」

「絶対、蘭に言いなさいよ。それなら言わないでおく。」

え  
？

聞いた瞬間衝撃が走った。

工藤くんが蘭に別れを告げたのはしっかりした理由があったんだ。

「工藤くん。これは私の口から蘭には言わないから安心して。というよりは”言えない”の方が正しいかな。でもこの話、早く蘭に言わないと後悔すると思う。取り返しの付かないことになっても良いの？」

「そう・・・だよな。言わないとまずいよな。」

「うん。言いづらいけど・・・ね。」

「ああ。今日はありがとな。園子。」

「こちらこそ。話聞けてよかったよ……。」

勘違いしてた。工藤くんが悪いと思ってた。

工藤くんも悩んでたんだ……。

#### 04・話を聞かせて（後書き）

CPはカップリングの事です^^

分からなかった方ごめんなさい；  
ていうか更新遅かったですかね・・・。

今度は早くできるはずです（^^）／

感想・評価よろしく願いします（^ー^）

1 / 6



## 05・信じられない

工藤くん、蘭に連絡したかな？

R R R R R . . .

着信音が流れたので携帯のディスプレイを見ると、毛利蘭と表示されていた。

蘭から電話なんてめったに無い。

いつもメールでやりとりしてたのにどうしたんだろ？

「もしもし。蘭が電話なんて珍しいね。どうかした？」

（あの子、園子。今日新一と会ったでしょ？）

「え、うん。」

（やっぱり。酷いよ。まさか園子だと思わなかった。）

「え？」

一瞬何の事が分からなかったけど、すぐに理解することが出来た。

勘違いされた　　。

普段の明るい声でその話をされたからってつきり工藤さんから連絡を受けたのかと思って話してしまった。

蘭は多分、私と工藤くんが喫茶店に居るのを見たんだ。

「蘭。私と工藤くんにそういうのはないよ。ただの勘違いだよ。」

（嘘だよ。だって私見たんだよ？）

「喫茶店に居るのを見た？」

(うん・・・。)

「工藤くんね、蘭のこと聞いてきたの。“蘭は元気か？”って。それで、“ショック受けてたよ”って言ったら、“俺最低だよな”って。蘭のこと気にしてるんだよ。」

(そんなの信じられないよ・・・。)

「じゃあ本人から聞きなよ。工藤くんの家に行つてさ。そうすれば信じてくれるしょ？」

(・・・うん。いきなり行つても大丈夫かなあ？)

「大丈夫だよ。本当に蘭のこと気にしてたから。いきなり行つても平気だと思う。」

(そっか。行つてみる。バイバイ。)

「バイバイ。」

大丈夫かな。

工藤くん、しっかり話すかな？

ピンポン

（ はい。 ）

インターホンを押して返事をしたのは女の人だった。

「新一？・・・じゃないよね、え？あの、新一に話があつて・・・。」

（ 開いてるから、適当に入って。 ）

玄関に居たのはさっきの女の人。その人に会って初めて言われた言葉に驚いた。

「こんにちは。毛利蘭さんですよ。」

「・・・え？」

「あなたのことは知ってるわよ。工藤くんからたくさん聞いてるもの。そろそろ来るんじゃないかと思ってたわ。」

新一が・・・私の話をこの人に？

なんで・・・？

「新一はあなたのせいで私に別れようっていったの・・・？」

「・・・知りたい？」

「え？」

「工藤くんがなんであなたの前から居なくなったのか。」

知りたいよ。

でも聞きたくないよ。

あの手紙に書いてある事は全部嘘で、他に好きな人が出来たのかも  
しれない。

理由が分からない。

でも……。

怖いよ……。

「  
教えて下さい。」

「あなたの人生が変わってしまうかもしれないけどいいの？」

「いま理由を聞かなかったら後悔するんです。じゃないと諦められ  
ない……。1人で生きてく決心ができないよ……。」

「分かったわ。工藤くんは　。」

「え・・・？」

予想もしていなかった言葉を聞いた。

いつから・・・？

思い返せば心当たりはたくさんあったんだ・・・。

## 05・信じられない(後書き)

早く更新できるとか言っておいてごめんなさい。

遅くなりました( )

文章の区切りがいいところが分からなかったのでもっと長めに  
なっていました(ノー；)

感想・評価お待ちしております！

はねて喜びます＼^^／

1 / 10



## 06・逝かないで？

「はやく来て、工藤くん。蘭さんが待ってるから。」

宮野さんが寝ている新一を呼びに行ってくれた。

ゆっくり歩く新一は、私に会いづらいのか、それとも・・・？

「・・・新一。」

目の前に現れた新一は心なしか痩せたように思う。

もともと細い体つきの気がしていたけど・・・。

「あ、工藤くん。私は用事あるから帰るわね。頑張つて。」

「え、おい宮野？」

多分宮野さんに用事なんかない。

私と新一を2人きりにしてくれたんだよね？

「・・・ねえ。新一？」

「何？」

「新一はさ、私のこと嫌い？」

「・・・んなことねえよ。宮野に聞いた？全部あいつが話したんだろ？」

「聞いたけど・・・。本当なの？」

「ああ。ごめん。」

「そっか・・・。」

（工藤くんは病気なのよ。それで蘭さんに迷惑をかけてしまつと思つて蘭さんから離れて行つたのよ。）

（迷惑なんて　　。）

（例えば、病気のせいで工藤くんが衰弱してつたとしたら・・・蘭さんは見ていられる？大切な幼なじみが寝たきりになって、苦しんで、ついには話すことすら苦になるかも知れない　　。そしたら、もう耐えきれないでしょう？）

（　　そんなことつ　　）

（あなたは幸せよね。まだ大切な人を失っていないんだもの・・・でもあなたが悲しむ姿は見たくない。）

耐えきれなくなる？病気だから？

病気でも新一は新一だよ・・・。

ずっと一緒に居れないんだ？

長く生きられないんだよね・・・。

いつの間にか新一はソファーに横になっていて眠っていた。

やっぱり、顔色悪いよね・・・。

新一が病気ということを嫌でも分かってしまう。

「新一・・・。逝かないで・・・。1人にしないで・・・。」

まだ、死ぬには早いよ。。

## 06・逝かないで？（後書き）

ごめんなさい！

書いたやつを読み直したら、おかしい所があつて、修正とかしてたらこんなに遅く・・・（^^;; ; ;

すみません、言い訳しました。

久しぶりの更新なのに短い文章＋駄文で大変なことに（。・。・）

次回も読んでくださると嬉しいです（―― ; ;）

1 / 2 1

## 07・気になること

起きると朝で、俺はソファアではなくベッドの上だった。

蘭は 帰ったみてえ。

昨日は蘭に久しぶりに会って、緊張して、何から話していいかわからなかった。

満足に話さないまま眠気が来て・・・。

耳の奥に残る蘭の声 。

逝かないで・・・。1人にしないで

どういうことだ？

逝かないで って

もしかしてあいつ・・・！？

「・・・ッ」

突然心臓が痛くなった。呼吸が苦しい。

宮野がくれた痛み止め飲まないと　　。

コップに水を入れて、薬のビンを取り出す。

ビンのふたを開けたいのに意識が朦朧としてよく見えない。

そして何より、力が入らなくなっていた。

早く薬を飲みたいのに・・・。

気がつくと俺は白いベッドの上だった。

左手には点滴。

息吸うのが楽だと思ったら酸素マスクもつけられてるみてえ。

「工藤くん。気が付いた？」

「宮野？ここは？なんで俺……。」

「ここは博士の家よ。……工藤くん、最近薬飲み忘れたことある？」

「……この前仕事行くときに持っていくの忘れた……。」

「あのねえ。薬なくしたり忘れたりしたら連絡しなさいっていったでしょう？倒れられるほうが迷惑なのよ？」



「1回くらい良いかなって思って……。」

「まあ、確かに薬飲み忘れただけじゃ普通なら倒れたりしないわよ。でもね、工藤くん。あなたあんまり寝てないでしょ？」

「なんで知って……。」

「分かるわよ。最近、あなたが大好きな推理小説の発売ラッシュだったじゃない。どうせ全部買ったんでしょ？夜まで電気ついてるあなたの家を見ればすぐに理解出来たわよ。そんなんじゃ睡眠とれるわけ無いでしょ。」

「……読まれまくりじゃねーかよ。」

「それに。工藤くん。あなたはさっき“この前仕事行つたとき”って言ったけど、警視庁に行ったの？病氣療養のためって言って、仕事回さないようにしてもらったんじゃないの？」

「確かに仕事は来ないように頼んだけど。前に担当した事件の詳細の報告をしに行ったんだよ。そういうのを電話でするのってよくないだろ？」

「まあ、盗聴とかされてたりしたら大変なもの・・・。」

「ああ。それにその時はちょっと顔色が悪いってだけで目暮警部とかがすごく心配してくれて。無理はしてない。」

「・・・まあこれから気を付けてくれればいいわ。それより、蘭さん呼んでくるわ。あなたのことすごい心配してた。」

「蘭が？」

「ええ。私は研究があるから2人でゆっくりするといいわよ。」

蘭はすぐ外に居たのだろうか、宮野が出ていってからすぐに入ってきた。

「新一！もう大丈夫なの？」

「ああ。」

「びつくりしたんだよ！？朝、新一の家に行ったら、新一が胸押さえて倒れてるし、呼吸も浅くて……。顔色すごい悪くて……。なんで自殺なんかするのよ！」

「……自殺なんてしてねーよ。」

「だって薬が！薬が床にいっぱい散らかってたじゃない。水もこぼれてて……。」

「散らかした覚えはねえけど……。いきなり苦しくなつてさ、痛み止め飲もうとして焦つてさ、そのうちに意識がはつきりしなくなつて散らかつちやつたんだよな。多分……。それじゃあそう見えてもおかしくないか。」

「自殺なんてしないでね？新一はまだ生きなきゃダメだよ……。死なないで……。」

「蘭はさ、俺が死ぬって思ってるの？」

「え、だって病気って……。」

「……そっか。」

やっぱりそういうことか。

でもなんでこんなこと・・・？

あいつに聞かないといけないな。

宮野に・・・。

## 07・気になること（後書き）

遅い・・・ですね。

ごめんなさい。

いまこの話はどのくらいまで来てるのかが分かりません（、、（

この話のラストの構想が2つになってしまったんですよ（、；；  
、（

どうやって終わるかは考え中です・・・（^^;;

メッセージ、励みになってます  
感想かいて下さると嬉しいです！

1 / 29

## 08・嘘は言わない

「・・・宮野。」

「あら、なあに？改まっちゃって。」

「蘭に俺のことなんて伝えた？」

「・・・病気って言っただけよ？」

「あのなら・・・。」

「嘘はついてないつもりだけど。あなたが病気なのは事実でしょう？何に不満があるっていうの？」

「分かってて言わねえつもりか？蘭、俺が病気で死ぬと思ってたんだよ。もう、治らない病気だって・・・。」

「私は治らないなんて一言も言っていないわよ。」

「じゃあなんで蘭は・・・！」

「そんな力リ力リしなくても良いじゃない。ちよつと、例え話をしただけよ。工藤くんが病気で寝たきりになる話をね。」

「なんでそんなこと・・・。」

「もしもって事があるじゃない。心の準備つてもものも必要なのよ。あなたも蘭さんもまだ失ってないじゃない。分かせたかったの。大切な人が居なくなるって事はこういう事か・・・。」

「え？」

「両親が居て、蘭さんが居て、信頼できる仲間もいる。みんな・・・まだ居るじゃない。私にはもう　　。」

「ごめん。でも居るじゃねーか。ここに。俺はおまえの相棒だぜ？」

「そう言ってくれると助かるわ。大切な人が居なくなるって事、少しは考えた方がいいわよ。絶対その時に楽になるはずよ。それに　　あなたは謝らなくていいのよ。」

「なんで？」

「分からせるためだけじゃなかったのよ。私、工藤君と蘭さんがうらやましかつたのかもしれない。だから少し意地悪しちゃったの。あんなに待たせても待っててくれるなんて素敵よね。私もそういう人欲しいわ。」

「あんまり気にしないでいいからな。実際さ、この病気も俺の生活のやりようによっては治んねーんだろ？現にさっきも発作起きちまつたし。」

「まあ、そうね。生活態度改めればすぐにでも治りそうなものだけども。でも治ったらすぐに。」

「あ、それだけは蘭に言うなよ。絶対引き止められるから。」

「だからって、言わないつもり？」

「わかんねえ。でも多分言わないな。」

「・・・そうやって心配ばかりかけて、待ってるほづの気持ちも考えなさいよ。」



「いや、今回は待っててなんていわねーよ。」

「え、じゃあ・・・。」

「ああ。今度こそ終わりだな。」

## 08・嘘は言わない（後書き）

今回は遅くならずにすみました（^^；

あんまり話が進んでない気もしますが・・・。

4月前には完結にしたいです。

感想・評価・メッセージ、励みになってます（^O^）

2 / 1

## 09・隠してること

倒れてから2日。

まだ外に出るのは許されていない。

それどころか

「おはよう。工藤くん・・・どう？」

「おはよ。宮野。どうって・・・普通・・・だな。」

「そう。まあ今から調べるんだけどね。」

と言われ体温計を渡された。

そもそも調べるんだったら俺に聞く意味ない・・・と思ったが、口に出すのはやめておいた。

「 なにか異常あるか? 」

「 あつても多分言わないわよ。 」

「 あ・・・そう。 」

「 体温は? 」

「 35.2 」

「 低いわね 。 しっかりと飯は食べてるの? 」

「 いやみかよ。 」

あの日以来栄養は注射と点滴からとっている。

食べても吐いてしまう。

「 あなたが食べてくれないと、私のせいになるじゃない。 実際私のせいなんだけど 。。。 」

「これって薬のせい？それとも病気のせい？」

「薬よ。多分薬が効いてるから副作用ね。もう少しすれば食べれるようになるはずなんだけど。」

「そ……か。」

「新」。そういえばさ……。」

「どうした？」

「園子がね、私たちのこと心配してたよ。」

「え、あいつが？」

「この前会ったでしょ？それで。」

「あいつ、何か俺の事言ってたか？」

「ううん。私がね、待ち歩いてて2人で居るところ見て、勘違いしちゃって……。それで園子に問い詰めたんだけど、2人が関係もってるって思ってた責めちゃったから。」

「ごめん……。」「

「新一は謝ることないよ。勘違いした私が悪いし。さっき園子に謝ってきたの。」

「園子、ごめん。」

「うん。大丈夫？しっかり話した？」

「うん。やっぱり新一……。」

「ねえ蘭。子供、あと5ヶ月だっけ？」

「うん。5ヶ月……。」

「蘭、私は別に気にしていないから、私のことより子供のこと考えないと……。あんまり無理しちゃダメなんだよ……。？」

「ありがとう。」

子供か。

しっかりしないと。

「新一、携帯鳴ってるけど・・・出なくていいの?」

「え、ああ、ありがとう。」

(新一、今ぼーっとしてた??? 考え事 ?)

「あ、もしもし。工藤です。あー、すみません いや、もう平気ですよ はは そんなに心配しなくても はい、折り返し連絡しますね 失礼します・・・。」

「誰と電話?」

「あー、別に普通の。」

「警視庁の人でしょ?」



「えっ？・・・なんで？」

「だって新一、言葉が丁寧だったし。大体新一と電話する人は限られてるじゃない。」

「  
　　そか？」

（いつもの新一なら、誰だか教えてくれるのに・・・なんで隠すの？）

新一、おかしい。

知られたくないこともあるんだ。

悪い思いながらも新一が寝てる時に新一の携帯の着信履歴を見てしまった。

さっき電話は警視庁からじゃなかった。

なんで？

FBI James Black

確かに、そう表示されてたんだ

。

## 09・隠してること(後書き)

読んでて分かりにくい所あったらごめんなさいm(\_\_\_\_)m

激しく表現力欲しいです(´; ;´)

感想・評価・メッセージありがとうございます(\*ノノ\*)(

次回も頑張ります

2 / 1 1

## 10・終わらせたい

なんでFBIの人から電話なんて来るの？

いくら新一でもFBIまでは関係ないでしょ・・・。

というよりも、新一は仕事を入れないようにしてるって・・・。

それなのに電話が来るっておかしくない？

何を隠してるの・・・？

その謎は解けることは無かった

。

あれから約1ヶ月。

病気の方はほとんど良くなって、発作もあれ以来起きていない。

薬は今でも服用しているけど、ずいぶんと量が減った。

だから。

「すみません。ジエイムズさん、今大丈夫ですか？  
う大分よくなりました。えっと・・・はい。日曜日の  
かりました。準備しておきます。」  
分 も

だからそろそろやらなきゃなって。

もうすぐ。

この時を3年間ずっと待ってたんだ。

「快斗・・・今大丈夫か？」

（なあに？新一から電話なんて珍しいじゃん。）

「お前にしか頼めねえ事があるんだよ。」

（それって。今から行けばいい？）

「ああ。よろしく。」

こっちも準備しておかないとな・・・。

ピンポン

・・・来んの速えよ。

「しーんいち！来たよー。」

「・・・速いな。」

「だって電話中に既に走りだしてたし・・・ぶっ飛ばしちゃった。」

「そんなことしたら警察に捕まるから。」

「捕まったら新一が助けってくれるでしょ？」

「あのなあ・・・俺は探偵だぜ？どうやって・・・。」

「警察に知り合いとか居るんでしょ？コネで・・・。」

「無理。どんなコネだよ。てか、使わないし捕まらないし。大体快

「斗なら捕まっても逃げれるだろ？怪盗KIDなんだから。」

「・・・もうすぐ“元怪盗KID”になるけどな。」

「元ってお前・・・辞めんのか？」

「今度の日曜日だね。」

「もしかしてお前もっ。」

「行くよ。だってやっと見つけたんだよ。」

「じゃあ一緒に行こうぜ・・・ぶっ潰しに。」



「宮野、来たよ。」

「あら、遅かったじゃない。てっきり検診さぼったのかと思ったわ。」

「んな訳ねえって。さぼったら後々怖いのは知ってるから。今日は用事があつたんだよ。」

「知ってるわよ。怪盗さん来てたものね。」

「なんで知ってるんだよ?」

「そんなの、バイクの音がうるさくて外見たら丁度貴方の家の前にそのバイクがとまって、乗ってた人見ればすぐに怪盗さんだって分かったわよ。」

「あいつ、すごい飛ばしたみたいだな。」

「で、何してたの?」

「準備。快斗にさ。。」

「ってことはそろそろなの？」

「あゝ、言っていないけ？日曜日に。」

「本当に言わなくていいの？まだ言っていないんでしょう？」

「大丈夫。また戻ってくるから。」

「絶対よ。．．．しっかり体力つけなさいよ？」

「分かってる。あいつら．．．ぶっ潰してやる。」

「本当に気を付けて。．．．検診始めていい？」

「ああ。わりい。話し込んだな．．．。」

宮野は俺に体温計を渡し、俺を椅子に座らせると聴診器を当てて力  
ルテに書き込みはじめた。

「大丈夫そうね。熱は？」

「35.7」

「低いわね……。」「飯は？」

「食べてる。俺の平熱が低めなの知ってるくせにいちいち嫌味みたいに言うなよな。」

「別にいいじゃない。この身体なら特に言うことはないわ。意外としっかりした生活してたのね。」

「・・・はやく終わらせたかったんだよ。」

そして、日曜日。

“また戻ってくるから”と言った貴方は戻って来なかった

o

## 10・終わらせたい(後書き)

快斗くん登場ですね。

平次と快斗、どっちを出すか悩みました( p | q )

話し方とか違ったら指摘して下さいと助かります。

感想・メッセージ・評価、励みになってます

2 / 18

## 11・聞こえた銃声

体調が良くなってきたと言つてすぐに“組織の残党が日曜日に動く”とFBIから連絡があつた。

返事はもちろん“行きます”だつた。

奴らとの戦いを完全に終わらせることが出来る。

そう思うと嬉しくて、気がゆるんでいたのかもしれない。

それに、まさかあんなことが起きるなんて・・・。

「工藤くん、一応この銃を持って行つて。護身用よ危ないと思つたら迷わず使つてのよ。責任とかは後からなんとかとるから・・・。」

空き倉庫の2階にはキャンティが居て、倒すときに何発も発砲されて、避けきれなくて3発当たった。

致命傷にはならなかったものの、痛みがキツい。

意識がとびそうだ・・・。

その頃蘭は、夕飯の準備をしていた。

1人分だけ。

今日は新一、飲み会なんだって。

テーブルにお皿を置いた時にふとテレビに目が行った。

さっきまでやっていたバラエティー番組はいつの間にかニュース番組になっていた。

“速報 男が護送中に警察官殴り逃走”という字幕だった。

『男は先日検挙された闇の組織の幹部の1人で、警察官の銃を奪って逃走中です。警察は付近を搜索中で』

これって 。

新一・・・無事だね？これには関係ないよね？

・・・だって今日は警視庁の人と飲み会・・・

あれ？新一、今まで飲み会は断ってたよね？



お酒に弱いし、薬がアルコールに反応するかもしれないからって。

・・・嘘つかれたんだ？

今はそんなことよりも新一が心配で、電話をかけていた。

(・・・蘭？)

「ねえ、新一、今飲み会なんてやってないでしょ？」

(・・・ばれたか。)

「事件？」

(あゝ、もう終わったよ・・・。全部。ごめん。もう待たせたりしないよ。)

「はやく、会いたいなあ。」

(今日会えるよ。)

「そうだね。ってかね、杯戸町であの組織の関係者が護送中に逃げたみたい。新一がなんともなくて良かった。今、どこにいるの？」

（杯戸町……。その関係者って誰だ？名前言ってなかったか？）

「名前　　言ってなかったよ？」

（そうか。蘭、気を付けとけよ。）

「うん。私は大丈夫。新一こそ……。杯戸町にいますでしょ？大丈夫なの？」

（大丈夫だよ。心配しなくてッ　　。。。）

「新一？」

今確かに聞こえた銃声、銃声、銃声。

通話は切れた。

新・・・・？？

確かに会えると言った君には会えたけど、

再び会うことは叶わなくて、

もう私は待つ必要もなくなっただ

。

## 11・聞こえた銃声（後書き）

今回更新はやく出来ました（＾Ｏ＾）  
切実に文章表現欲しいです（。。（

ラストの構想出来ました

多分もう少しなので楽しみにしてて下さい（\*、、（

2 / 2 3

## 12・消えゆく意識

気が付くと隣の阿笠博士のところに駆け込んでいた。

宮野さんなら何か知ってると思ったから・・・。

「新一は・・・?」

「飲み会に行ってるって。。。」

「そうじゃなくて!本当に居る場所は!?!組織と関係あるんじゃない?」

「工藤くんが自分でそう言ったの?それ・・・。」

「違います。けど・・・ニュースを見て・・・。」

宮野はりモコンを手に取り、テレビの電源をつけた。

この時間でニュースをやっているのはどのチャンネルだろうと考えたが、つけた時にやっていたチャンネルでニュースらしきものをやっていた。

このチャンネルは・・・日売テレビだから確かクイズ番組をやっているはず・・・。

番組変更するほどのニュース？と思い見る。

逃走中の男は銃を所持しており、杯戸町の空き倉庫付近で銃声が聞こえたという通報が相次いでいます。

「博士、車出して！杯戸町に　　！！蘭さんは　　？」

「行きます！」

博士は車を出すと、気を効かせてラジオのボリュームを上げてくれた。

「　　男は先日検挙された謎の組織の幹部で、特徴は長髪、鋭い目　　。」

ジン・・・!!

やっぱりあの組織で間違いなさそうね・・・。

「宮野さん・・・。新一の後ろで銃声がした気がして・・・。新一は・・・。」

「大丈夫。彼ならきつと。あたったとは限らないでしょ・・・?」

「でもっその銃声のあと電話が切れちゃって・・・。」

「工藤くんを信じなきゃ。。。」

突然の激痛に顔が歪む。

左胸、心臓の少し上らへんを撃たれたらしい。

キャンティは倒して柱に縛り付けたはず……。

なんでっ……？

「久しぶりだな……工藤新一……。」

「っ！お前なんでここに……。」

撃つたのはジンだった。

「組織から情報が入ったからな……おまえを殺すのにいいチャンスだろ……？」

「なんでそんなに俺を殺したがる？」

「殺したはずの人間が生きるのが不愉快なだけだ。さあ、死んでもらおうか……。」



パン                    と嫌な音が響く。

「新一！」

ジンが持っていた銃が落ちた。

的は外れ、足に弾があたった。

快斗がトランプ銃で助けてくれたのか。

「仲間か                    、俺はお前の死顔は見れないようだ。」

ジンはそう言つと落ちている銃を拾い、自殺した……。

「新一、帰ろ？もう終わったんだよ……。」

「・・・。」

新一は足を撃たれた痛みで立てないらしい。

「大丈夫。背負ってくから。」

新一は思っていたよりもはるかに軽く、体が細かった。

「・・・ありがとう。あのさ。俺が頼んだこと覚えてるか？」

「覚えてる。でももう帰れるから。」

「・・・。」

「・・・新一？」

新一は意識を失っていた。

外には警察がたくさんいた。

銃声の通報で、ジンがここに居る確立が高いという理由だろう。

待機していた救急隊員がいろいろな機材を持って新一に駆け寄る。

それと、蘭ちゃんも。

「新一！……。」

「？」

「しっかりしてよ！」

「快斗に……聞いて。」

「え……？」

「うめ……。」

最後に見た新一は笑っていた。

すごい血だらけで……痛かったでしょ？

なのになんで……笑ったの？

## 12・消えゆく意識（後書き）

遅くなりました……

よくわからない所あったらごめんなさい。

メッセージありがとうございます。

すごい励みになってます

感想お待ちしてます（＾Ｏ＾）／

3 / 13

### 13・朱色の名探偵

新一はジンに最初に撃たれた胸からかなり出血していた。

他にも撃たれたところから流れ出る赤。

9発も弾を受けたようだった。

救急車の中で、すでに新一はショック状態で、

意識がないどころか、呼吸までもしていなかった。

輸血が間に合わない。

誰でも分かる。

出血が多すぎる　と。

救急車が病院に着いて、新一はすぐに運ばれていった。

何分たっただろう？

新一が運ばれてから　。

実際はそんなに経っていない。

こんなに時間を長く感じたのは初めてかもしれない。

1分が1時間にも感じる。

新一……。

「蘭ちゃん。」

足音に全く気付かなかった。

声をかけられるまで……。

「快斗くん……。」

「ごめん。来るの遅くなっちゃった。」

「快斗くんも怪我したんだから仕方ないよ……。大丈夫？」

快斗も新一ほどではないが、怪我をした。

包帯や絆創膏が身体中にある。

かなり痛そうだった。

「新一がこんな時にさ、痛いなんて言ってられないよ。」

「新一……いまどんな感じなのかな。」

「血が足りないかもって。」

「私の血液型、新一と同じだから……。」

「止血が出来ないみたいだよ。それに・・・運ばれて来た時には新一・・・ショック状態だったし・・・。」

「それじゃあ、もう新一は・・・？」

病院に運ばれて3時間。

深夜に新一は逝ってしまった。

私と、子供を残して。

寝かされている新一を見ると、すごいたくさんの傷跡があった。

足がすくんだ。

見るのが怖かった。



新一の“死”を受け入れられなかった。

肌は透き通るように白い。

もう呼吸も脈も感じられない。

新一の頬は冷たかった。

もうあの優しい声は聞けないんだ……。

新一……。

私には絶望の色しか見えなかった。

### 13・朱色の名探偵（後書き）

最初に言っておきます。

ごめんなさい（――；）

私ですが、部活を辞めたり、

新学期なので忙しかったりorz

なんとなく下書きしたプロットもどっかに消えて、ヤル気が消え、  
気付いたら2ヶ月経ってました。

覚えてますか？（；＾―＾A

ものすごい亀更新で新一も・・・なんて私、最低ですよね：（）

久しぶりにログインしたら、

メッセージが貰えてて、

感動しました＼（＾O＾）／

更新待ってた方、ここまで読んでくれた方、

ありがとうございます！

次の更新も頑張ります（＞＜）

5 / 14

## 14・私たちは味方

次の日のテレビは新一のことばかりやっていた。

各テレビ局が特番を組んで、

新一が今まで解決した事件や、過去のインタビュー映像を流していた。

「工藤新一、空白の1年の裏側」

そんな内容のものも少なくなかった。

見ると、その裏側というのはあくまでも誰かの考察にしか過ぎなかった。

新一は、居なくなっていた時のことを詳しくは教えてくれなかった。

“危ない組織があった”

というようなことだけ聞いた。

私も聞いてないのに、テレビ局が知ってるはずがない。

・・・でも、新一の映像を見ると、

新一は死んだんだと分かっているも何だか近くにいる気がして・・・

このまま普通に新一が現われるんじゃないかって・・・

なかなか受け入れられなかった。

「新一君、痛かったでしょうね……。9 発って聞いたけど……。」

「お母さん……。」

「あの探偵ボウズ、蘭を残して逝きやがって                      ただじゃおかねえぞ……。」

「そうだな                      。あいつは蘭さんと子供をどうするつもりだったんだ？」

「お父さん……優作さん……子供は生みたいです。新一との子供だから                      新一が居なくても……1人でも……頑張ります。」

「蘭ちゃん！生んでくれるのねー！ありがとうー！それ・に、1人でなんて言わないで？私たちがサポートするわよ。ね？優作。」

「ああ。新一の代わりにはなれないだろうが、出来る限りのことをしよう。」

「有希子さん。優作さん。ありがとうございます……。」

新一のお葬式には

行きたくなかった

そう言っただけど

園子に連れていかれた

みんな、黒い服着てる

なんで、泣いてるの？

和葉と平次は新一の葬式に参列し、異変に気がついた。

痩せた・・・？

というよりも、

やつれていた。

「毛利のねーちゃん、ちょっとやばいんとちゃうっ、」

「……ちやんこやんこ」

#### 14・私たちは味方（後書き）

この先どうなるんでしょうかね

・・・私次第ですが（笑）

評価、感想、メッセージ  
下さい下さい（\*´、´）

5 / 25

## 15・忘れられない

数ヶ月後　　。

子供は無事に生まれた。

女の子。

でも新一の面影もある。

新一……。

私は、まだ新一のことを忘れられないでいた。

あ、別に忘れるつもりもないんだけどね。

なんていうか……。

新一がね、いきなり電話とかしてきそうだって。

まだ……生きてるんじゃないかってね。

絶対ないことは分かってる。

自分の目で　　見たから。

でも高校の……2年の時に新一が居なくなってた時と同じ感じがするんだ　　。



ピリリリリ・・・

（電話？非通知だけど・・・。）

「よお、蘭、元気か？ちょっと話したいことがあるから、家まで来てくれ！」

相手はそれだけ言っていると電話を切ってしまった。

。

声は、新一だった。

話し方も・・・？

子供を連れ、新一の家まで行った。

門が開いていたので、勝手に入った。

すごい、久しぶりの、新一の家。

結婚してから、引っ越したから・・・。

「蘭ちゃん。」

「快斗くん？？」

「ごめん、新一の声使っちゃって・・・。」

「さっきのは・・・快斗くんか。」

「うん。どから説明しようかな……。ちょっと目をつぶって  
……。いいよ。」

目をあけると……。

「怪盗キッド……?」

「俺ね、つい最近まで怪盗キッドだったの。」

「だって　　もつと昔からキッドは居たよね?」

「それは父さん。組織に殺されたけど。俺はその組織が狙ってる宝石をとれないようにするために、キッドをやった。」

で、その組織が新一の追っていた組織と同じだったんだよ。」

「　　組織?なにそれ……?」

「やっぱり聞いてないよね。これ、新一から頼まれてただけだよ。」

さっきまで何も持っていなかった快斗くんの手には1枚のDVD。

「じゃあ、新一の最後の声、聞いてみるか。」

## 15・忘れられない(後書き)

こんにちは！

大体の流れをまとめといった紙を紛失しました  
大丈夫。多分変わらないはず。

たぶんorz

今回は新一登場！？(^^)

話とは関係ないですが、

今度学校で体育祭があります。

やだなー、やだなー( )

6 / 1

## 16・遺された言葉

蘭　。

これを見てるってことはさ、

オレ　。

死んだってことだよな？

ごめん・・・。

結局、オレは蘭に迷惑ばかりかけてるな・・・。

待つなって言ったけど・・・。

本音言っとな、

待ってて欲しかった。

生きて帰って蘭と幸せになりたかった。

幸せにしてやりたかった。

でも、オレはもう無理になっちまったんだろ？

・・・。

子供、もう生まれたんだろ？

見たかったよ

名前もさ・・・考えてあった。

言わないけどな。

オレが居なくてもしっかりやってけるよな？

蘭なら大丈夫だよな？

蘭のことだから、

新一が居なきや無理

とかって言うかもしれないけどな。

大丈夫って思わないと、オレ、

死にきれなさそうだしな。

ごめん。

辛い。

お別れなんてしたくない

。

ずっと蘭と居たかった。

幸せになれよ。

「

新一は泣いていた。

普段泣かなかったのに・・・。

「快斗くん、ありがとね。」

「うん。なんか、ごめんね。俺帰るよ。」

「ありがと。じゃあ、また今度。」

・・・

新一。

新一・・・。

（ 死のうとしてんのか？ ）

「！！」

（ やめとけよ。子供居るんだから・・・。 ）

懐かしい声。

聞き間違えるはずがない。

これは、新一の声 。

16・遺された言葉（後書き）

・・・ごめんなさい。

久しぶりです。

そして短いすよね：）

文章ぐだぐだでごめんなさい）、；；（

7 / 13



## 17・居ない筈の人

「蘭ちゃん、元気やるか？」

「それが気になるからきたんやる。」

平次と和葉は東京に来ていた。

最後に見た、やつれていた蘭のことを不安に感じて。

少しでも元気になってほしくて。

それに、出産祝いも兼て。

「子供は工藤に似とるか、毛利のねーちゃんに似とるか、どっちやと思う？」

「女の子やろ？そりゃやつぱ蘭ちゃん似やと思つわ。」

「工藤も結構美人やから、子供が工藤に似とつてもかわええんやろなあ。」

「ところで、いいん？うちらアポなしやで。」

「きつとなんとかなるやろ。」

「蘭ちゃんおる〜？」

「和葉ちゃん、服部くん!？」

「アポなしですまんなあ。」

「ん、いいよ。とりあえず上がって。紅茶入れてくるね。」

適当にくつろいで

「蘭ちゃん、またやせたな。・・・平次?どうかしたん?」

座ったソファでくつろいでる和葉をよそに、平次は同じところをずっと見つめていた。

「なあ和葉。いま、ねーちゃんの後ろになんか見えへんかった?」

「気付かんかったよ。」

「そか……。」

「なんかみえたん？」

「ん、ちよつとな。」

今は……。

今日は泊まって確かめんなあ

平次は新一が使っていた部屋で寝ることになった。

「ごめんね、服部くん。他の部屋散らかってるし、此処しかなくて」。

「いきなり来た方が悪いんやから、気にせんでええよ。泊まらせてもろて感謝やて      それよりも、ねーちゃんはええんか？」

工藤が使ってた部屋。

もしねーちゃんの立場やったら、誰もこの部屋にはいれない。

工藤が消えてく気がして。

ねーちゃんはええんか？

「え、だって新一は此処・・・っ！　　し、新一は、この部屋ほとんど使っていないの・・・新一、事件とかであんまりこの家に・・・居なかったし。」

「そうなん・・・。」

「え、ええ。じゃあ、何かあったら教えてね。おやすみなさい。」

“え、だって新一は此処に・・・”

此処に？

「どついつことや・・・。」

此処に・・・居る？

工藤、もしかしてねーちゃんに取り付いてるんとちゃうか？

それともねーちゃんが引き止めてる・・・？

考えすぎなんかな・・・

工藤・・・。

## 17・居ない筈の人(後書き)

こんにちは( )

覚えてますか??( ; ; )

2ヶ月以上ぶりです・・・。

感想・メッセージ下さい

10 / 1

## 18・彼女の後ろに

翌日

ただ1つ、確かめたいこと。

「なあ、工藤そこにおるのやろ？」

「え、いきなりどうしたの？新一は・・・」

「ちよつと平次！いくらなんでも蘭ちゃんに失礼やとか思わんの！？」

「そりゃ、普通は聞かんわ。」

「ただ。これは普通とちゃう。」

「・・・隠すことないやろ。」

「　　つ。そう・・・だよね・・・。新一・・・出てきて」

「やっぱり。」

「俺の予想は間違ってたんや。」

「え・・・蘭ちゃん・・・これ、どうということなん？」

「新一ね・・・死んじゃったけどまたこうして戻って来てくれたの。いますごい幸せなの。だから邪魔されたくなくて・・・みんなには秘密にしておこうと思ったんだけど。」

「邪魔なんてせえへんよ。」

“ 気配、消してたのに・・・なんで分かったんだ・・・ ”

「・・・いる気がしたんや。うつすら　ねーちゃんの後ろに影見えとったし・・・ダメ元で試してみたんや。」

“ そうか・・・ ”

「　また会えるとは思ってなかったで・・・。」



“また・・・話せるとは思わなかった・・・。”

「・・・ちよつと工藤と2人で話させてもってもええか？」

「うん。           じゃあ私、席はずすね。」

「単刀直入に聞くで。なあ工藤。なんで此処におるんや・・・？何か理由があるのやろ？」

“オレもわかんねえ・・・ただ、オレが居ると蘭が元氣じゃなくなる・・・。”

「え？・・・むしろ明るくになつてるように見えるんやけど。」

“‘表面’だけな。”

嫌な予感。

「・・・！もしかして工藤・・・。」

“簡単にいとな、多分、オレが居ること蘭の生命力が減ってる”

「ちょっと言い方悪いけど堪忍な・・・。工藤がおつたらねーちゃんが死んでしまうっちゆうことなんやろ！？なんでねーちゃんから離れないん！？」

“離れられない”

「なあ。もしかしてねーちゃんの周りにしか居れないんか！？」

“よくわからねーけど、多分・・・な。それに、蘭自身も気付いてるんじゃないか？オレが現われてからの身体の異変に・・・”

・・・助けられないんか？

また・・・失ってしまう？

どうすればいいのや・・・。

## 18・彼女の後ろに（後書き）

今日はHalloweenですね（・・）

私ずっと“ハロウィン”って  
言っていました・・・。

“ハロウィン”なのね（・'|・）

今回は新一登場。

服部のニセ関西弁は聞き流してして下さい（口・）

感想・メッセージありがとうございます（\*^o^\*）

跳ねて喜ぶのでまた下さい（笑）

10/31

## 19・触れられない

「ちょお、詳しく話してくれや。」

覚えてる範囲でええから、

・・・死んでまうあたりから・・・。

“ いろんなところ撃たれて・・・ジンに撃たれたあたりからさ、もう痛いとか感じなくて・・・。

快斗と話してる時にいきなり周りがやけに静かになって・・・。

死ぬ前に最後に見たの蘭なんだ。

まだ伝えたい事があつた気がするのに、目の前が真っ暗になって。なにも聞こえない。

気付いたら、俺の葬式で。蘭が居て。いつもの蘭なら泣くのに、俺の遺影みて立ってて・・・。

ああ、俺死んだんだ・・・。

そしたらまた周りが暗くなった。

次気付いたら、蘭が目の前に居た。思い詰めた顔して。

状況はよく分からなかったけど、嫌な予感がしたんだ。

蘭が死にたいって考えてるんじゃないかって思って、話し掛けたって聞こえないって分かって話しかけた。

（死のうとしてんのか？）

「！！」

蘭は、気付いてくれた。

（やめとけよ、子供居るんだから・・・。）

蘭には声が聞こえてるのか。姿は？

「どこに・・・いるの??」

（蘭の横にいる。・・・さすがに見えないか。）

「　　ついでるね。」

（え？）

「血・・・ついてるね。」

俺が着ている服は死んだときと同じで、血だらけだった。

（ つ。すごいな、この血……。 ）

言われるまで気付かなかった……。

落ち着け、俺。

いつでも冷静でないと

まともな推理が出来ない。

どうして、俺は……。

「痛くない？」

（全然。もう幽霊だろ、この体は。何も触れないし。）

「じゃあ……。 」

（蘭。来いよ。）

俺が蘭を抱きしめようと両手を広げた。

蘭はそれを応えようと俺に近づいて  
・・・

次の瞬間には蘭は俺の後ろにいた。

通り抜けたんだ。

すごい悔しかった

（なあ、蘭。）

「なに？」

（子供の名前、教えてくれないか？）

「その前に、新一がつけたかった名前は何？」

（まみ。女ならそれがいいと思ってた。）

「うそ・・・。」

（・・・実際は？）

「まみだよ。しんじつつて書いてまみ。」

（まじ・・・かよ。）



「新一ならそうやってつけるかな？って思っただけ反対されたんだけどね。」

（ 反対って、父さんと母さん？ ）

「有希子おばさんは、“蘭ちゃんが好きに決めていいのよ”って言うってくれて。優作おじさんが“私と新一の名前をとって 新作 っ てのはどうかな？”って言ったの。」

（はっ！？父さんおかしいだろ！産まれたの女だし、もし男だとしても新作ってなんだよ。）

「結構本気だったみたいだよ。」

（父さん、趣味悪い・・・。）

蘭は俺の事を誰にも言わないでいてくれたし、誰にもばれなかった。もちろん父さんや母さんにも気付かれなかった。

気配消してたから。

服部と遠山さんが来た時も大丈夫だと思っていた。  
なのに服部は俺の方をずっと見ていた。

服部は蘭にかまかけるし……。

もう隠れられないと思った。

……こんな感じでどうだ？

何か聞き足りないことあるか？”

「つらいこと思い出させてすまん。……やり残した事があるんじゃないか？」

（やり残し……？）

「“伝えたい事”ってなんや？覚えとる？」

（ああ。あの時は朦朧としてて分からなかったけど、いまならはっきり覚えてる。）

やり残したことはただ1つ。あれを蘭に言っただけでなかったんだ。



## 19・触れられない（後書き）

来週の土曜日は高校の文化祭があります。

喫茶店で紅茶ダーズリンを入れまくります（＊、＊）

あと、にんじんケーキとあんパン売ります。

まじで大変（、；、；、）

メッセージもらえるとやる気がアップするのでよろしく願いします（@^^@）

よかったらポイント入れてね

ダメ出しも待ってます。

優しくしてね（p|q）

11/10

## 20・二人で一緒に

やり残したことはただ1つ。

「なあ、工藤……。そのやり残したことうちゅうんをやればいいんとちゃうん？」

（……多分そうなんだろうな……。）

はやく言わないと……。

しかし……。既に……。

（蘭……。俺さ……。ずっと言ってなかったけど……。コナンだったんだ……。トロピカルランドに行った日から……。俺が帰ってくるまで。ずっと……。）

元に戻ったあともずっと隠してきた、俺の1番知られたくない秘密。

……ずっと言えなかったこと。

「嘘……。つかないで。別人……。でしょ？……。」

(っ……。)

「信じないよ？」

少し困った、いまにも泣きそうな顔で。

「……もし新一がコナンくんだったとしてさ……それを私が認めたら、新一、消えちゃうんでしょ?? また、私の前から居なくなっちゃうんでしょ？」

蘭が認めたら、

言い残したことはなくなってしまう。

そしたら多分俺は……。

(っなんで……。なんで蘭にそんなことが分かるんだよ……。  
)

「分かるよ。分かる。何年一緒にいたと思ってんの……?」

(蘭、お前何考えてんだよ!? そんなことしたらおまえが消えちゃうだろーが!)

俺がこのままだら

蘭を……蘭を連れてくことになっちゃう……。

「……もう、いいよ。新一。いいの……。」

（俺は消えてもいいんだよ。もう死んでるんだよ。蘭は・・・蘭はまだ・・・お願いだから・・・。）

蘭がふつと笑う。

「もう、終わりなの。」

知ってたよ。新一がコナン君だったこと。なんとなく気付いてた。なにかもが似すぎなんだよ。言わなかったのはね、どんな姿でもずっと居てもらいたかったからなんだよ

（蘭ごめん・・・俺のせいで・・・）

「新一が連れていってくれるなら・・・。」

なに謝ってるの・・・？

俺が居なければ・・・。

“ やつと、私たち触れるんだよ      ？？もう、ずっと一緒だね・・・。  
”

新一は涙を流していた。

蘭は嬉しそうだった。



## 20・二人で一緒に（後書き）

いつも遅くてごめんなさい。

それでも読んでくださるみなさんありがとうございます。

あと1、2回で完結させたい。

次話を書きたくて仕方ない

でも掛け持ちは出来ないorz

天空の難破船のマンガ出ましたね＼（＾Ｏ＾）／  
下巻が出るの楽しみです

12 / 4

## 21・両親の代わり

「はやくっ！今日は大事な日なんだからね！」

「分かってるわよ、だって何着てくか迷うじゃない……。」

ピンポーン

「ほら、来ちゃった。支度はやくしてね！」

「久しぶりやなあ！真実ちゃん！さっすが工藤と毛利のねーちゃんの血い流れとるって感じやな！めっちゃべっぴんやもん。それに比べて和葉は……溜め息もんやで。」

「えーっと……。」

「ちょおオトン黙れや。真実が困ってるんがわからんのか。」

「あー、スマンスマン！いまの和葉には内緒な！」

「平次、もう1回ゆつてみ！全部聞いてたんよ！」

「うわ、和葉いたんか！」

「最初から居たで！一緒に来たのに何ゆつてるん！？こつちでゆつくり話そうか？なあ？」

「わゝ、タイム！タイム！」

「・・・うちのオトンとオカンうるさくてごめん。」

「気になくていいよ！」

服部平次と遠山和葉はあのあと結婚し、子供を産んだ。

名前は服部和輝。

今は15歳で、高校1年。

真実は17歳、高校2年。

「あゝ、今年もまた報道されるんかな？」

「多分ね。」

「記者いっぱいおるんやろな。」

「世間は忘れてないんだよね。私のお父さんとお母さんのこと。」

“私、何にも覚えてないのに”

今日は大事な日。

2人が眠っている所に行く日。

「工藤。」

「蘭ちゃん。」

また今年も会いに来たよ。  
。

「真実さん！もしかして隣に居るのは・・・“あの組織”の一員だった宮野志保さんですか？真実さん、大丈夫なんですか？お父さんはこの人に殺されたんですよ？」

「・・・何で皆さんはそういう事ばかりいうんですか？もう何年もたってますよね・・・？それに私は、そんな風に思っていないです・・・。」

「それは宮野さんを許すつてことですか？」

「許すも何も私は何もされてません。それに、元は父の軽はずみな行動が原因です。薬を作っていたのは命令され、組織に歯向かえなかったからです。志保ちゃんが直接殺したわけじゃないし、毎年この時期になると父の特集番組やってますよね？皆さんがそのことについて知らないはずはないと思うんですけど・・・。」

それに、私は両親のことを覚えてないんです。物心ついた時には、両親は居なくて、優作さんと有希ちゃんと暮らしていました。優作さんと有希ちゃんがロサンゼルスに行つて、1人暮らしになつてから、志保ちゃんが世話してくれるようになりました。私にとっては親みたいな存在です。悪く言わないで下さい。」

「さっきの格好よかったで。」

「平次おじさん。」

「宮野のねーちゃん、口には出さんけどな、喜んでると思うで。」

「そう……ですかね。」

「工藤が死んで、毛利のねーちゃんも死んで、みんなショックやったけどなあ、宮野のねーちゃんが1番苦しんだと思うで。だから、真実ちゃんがかばってくれたんは嬉しいことなんやで。」

「私は」

「何や？」

1度聞いて見たかったこと。

「私は両親に似てますか？」

自分では分からないから。

「んー、せやな。似てるか似てないかやったら似てるで。」

「どっちに……ですか？」

「どっちもや。」

大切な誰かを守ろうとするところは工藤そつくりや。

・ ・ ・ 守られてる方は自覚ないんやけどな。

周りを気遣う優しさがあるんは毛利のねーちゃん譲りやな。工藤は夢中になると周りなんか見えてなかったで。」

そっか。

似てるのか……。

「ありがと、平次おじさん。」

相談出来なかったのは

悔しいけど……。

決めたよ。決めた。

将来に関わる大事なこと。





## 21・両親の代わり（後書き）

遅くなりました（・・・）

次回、最終話ですよ\*

投稿は・・・明日（12/24）の0時を予定してます^^

感想、メッセージ、評価ください！  
めちゃ喜びますよー！

次書いてほしい設定があったら  
リクエストしてください（・）

12・23

## 22・やりたいこと

「2人に似とるからほんまべっぴんさんやな。どや？嫁になつてくれへん？」

「平次さんには和葉さんが居るじゃないですか・・・。」

「あー、ちやうちやう。まあ真実ちゃんが嫁になつてくれるなら嬉しいんやけどな。」

「じゃあ・・・。」

「和輝や。」

「えっ」

「和輝に真実ちゃんは釣り合わんなあ。真実ちゃんの方が優秀やもんなあ。」

「ちょお待てや！なに勝手にそんな話してんねん！真実に迷惑かるやろ！」

ねえ、見えてますか？

私は今幸せです。

こんなにいい人たちがまわりに居ます。

でもね、ちょっと寂しい。

私はテレビと写真でしか見たことないから・・・。

・・・嘘。

ちょっとじゃない・・・。

寂しいよ。

テレビで見れるのはお父さんだけ。

それは事件を解いたあとの会見とかのものばかりで、

それは結局オモテの顔。

はやく、会いたい。

待っててね・・・？

それとね、

私、決めたんだ。

探偵になる。

お父さんと同じ探偵に。

今日みたいに記者に嫌なことを言われることもあると思うけど、

頑張るよ。

お父さんを越してみせるから。

見ててね・・・。

## 22・やりたいこと(後書き)

1日はやいけど、

メリークリスマス( )

我が家にサンタは小学6年から  
来なくなりました(。( ) 笑

最終話どうでした？\*

感想、メッセージ、評価ください！

喜びます(。( )

次回作のリクエストも受け付けてます  
書く保証はないけど(。( ) 笑

それじゃあ、よいお年を！

12・24

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2178j/>

---

遺されたモノ

2010年12月28日16時25分発行